

4～6 歳児のストーリーナラティブの 評価指標の検討 —ナラティブ発達評価指標作成に向けての基礎研究—

○瀬戸淳子 (帝京平成大学)

秦野悦子 (白百合女子大学)

キーワード：ストーリーナラティブ、評価指標、幼児期

問 題

本報告は、ナラティブ発達評価指標作成に向けての一連の基礎研究の一つである。報告者らは幼児期後半になって発達してくる会話やナラティブといった談話能力の発達機序やプロセス、評価の方法論について検討するために、ナラティブに関連する 7 種の課題を作成し、4 歳から 6 歳児を対象に調査を実施した。その一つがストーリーナラティブ課題であるが、これまでにストーリーナラティブの能力が、5 歳から 6 歳前半にかけて高まる様相が明らかにされた(瀬戸・秦野 2014a, b, 2016a)。本報告では、ストーリーナラティブの発達指標の検討を行うことを目的とする。

方 法

調査参加児：保護者の調査協力の承諾が得られた幼稚園年中児年長児 83 名 (4 歳前半 4 名, 4 歳後半 17 名, 5 歳前半 23 名, 5 歳後半 14 名, 6 歳前半 15 名, 6 歳後半 10 名)。本報告では課題に集中して取り組めなかった 3 名を除く 80 名を対象とした。**調査期間：**2013 年 2, 3 月 7 月。**材料：**出版社と著者の許可を得て作成した字のない紙芝居「クレヨンのはしご」(板橋敦子著 ひさかたチャイルド発行)と読み手の質的刺激提示を一定にするために作成した調査用紙芝居 CD。**手続き：**紙芝居の CD を聞かせながら調査者が絵をめくり紙芝居を見せた後、視覚的手がかりが無い状態で紙芝居の内容を話してもらった。すべての発話は IC レコーダーに録音した。**分析資料：**ストーリーナラティブ課題については、すべての発話のトランスクリプトを作成し分析の対象とした。語られた表現内容の構造分析を行うために、物語の筋立てに必要な 21 の基本述語文(動詞述語文 20, 形容詞述語文 1)を抽出し、子どもが語った基本述語文の出現数をストーリーナラティブ得点 (SN 得点) とした。また、物語の発端、展開、結末部の 3 場面で語った場面数、物語に出てくる登場人物 6 名中の出現数を分析の対象とした。

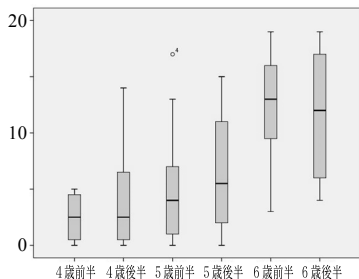


図 1 ストーリーナラティブ得点 (SN 得点)

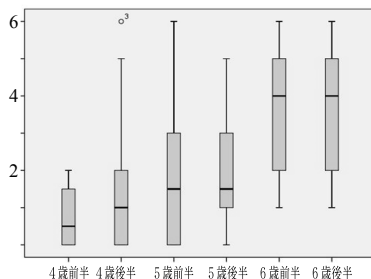


図 2 登場人物数

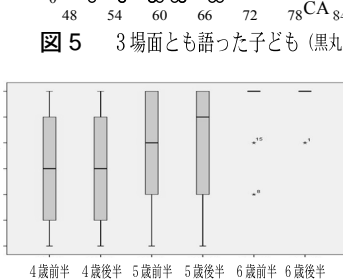


図 4 語りの場面数

結果と考察

SN 得点と歴年齢の関係は同じ年齢であってもバラツキが大きいですが、四分位を用いて各年齢の中央値とデータの散らばりを見てみると 5 歳後半 (中央値 5.5) から 6 歳前半 (中央値 13) に SN 得点が急に高くなる傾向が示された (図 1)。また、語られた登場人物数も SN 得点と同様の傾向が見られ、バラツキはあるが 5 歳後半 (中央値 1.5) から 6 歳前半 (中央値 4) に SN 得点が高くなる傾向がみられた (図 2)。次に歴年齢と SN 得点、登場人物数の対応関係をみると (図 3), 登場人物を多く語っている子どもほど SN 得点が高い傾向が示された。物語を発端、展開、結末部の 3 場面に分けて語った場面数をみる (図 4)

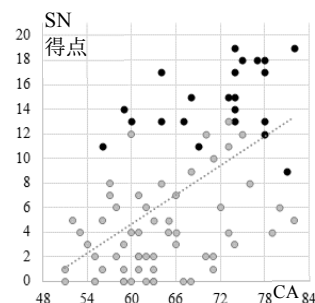


図 3 4 登場人物以上語った子ども (黒丸)

語りがみられた子どももあり (図 5)、年齢の幅も広い。その様な子どものナラティブの質を他の課題とも対応させながら検討をしていきたい。

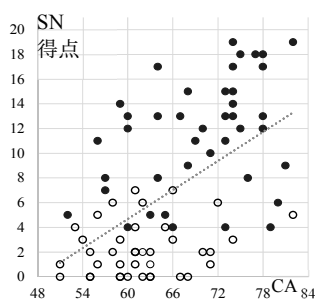


図 5 3 場面とも語った子ども (黒丸)

本研究は平成 27～29 年度基盤研究 C (課題番号 15K04572) の助成を受けている。